Osaka University Knowledge Archive

Title	中世劇文学の研究 : 能と幸若舞曲
Author(s)	小林, 健二
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43155
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【11】

氏　　名	小林健二（こばやしけんじ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　16544　号
学位授与年月日	平成13年10月16日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**中世劇文学の研究　－能と幸若舞曲－**
論文審査委員	（主査） 教　授　伊井　春樹 （副査） 教　授　天野　文雄　　助教授　荒木　浩

論文内容の要旨

本論文は、中世における劇文学の諸相や歴史を、能と幸若舞曲という二つのジャンルから論じたもので、相互の関連、成立の基盤、上演の様相、テキストの書承関係、伝本や挿絵など、多様で体系的な内容となっている。全体は序論と二部からなり、第一部は五篇、第二部は四篇、巻末に資料を付し、400字詰め原稿用紙に換算すると、およそ1500枚余となり、本文には多数の図版も挿入する。能と幸若舞曲は、同じ物語世界や伝承世界を土壌として育ち、発展した文芸ながら、従来一書にまとめて同等に取り扱われてこなかっただけに、本論文は本格的な総合研究といえるであろう。

序論では、研究史を概観しながら、能と幸若舞曲が素材の世界において共通しながら、直接的な影響関係にあるものは少なく、それぞれ独自の文芸的な達成をしていること、具体的に「満仲」を対象にし、〔演劇としての能〕と〔語り物としての幸若舞曲〕の本質的な位相を追究し、両者の比較研究の必要性を説く。

第一部「能」の第一篇「田楽能」では、劇能に関する最初の資料とされる「貞和五年春日社臨時祭次第」の資料としての本文批判を行い、田楽能「斑足太子の猿楽」が『三国伝記』所収説話を題材にしていることを明らかにする。これ以外の資料などから、能楽が大成する以前の劇能は、説話などの素材をかなり忠実に劇化したものであろうとする。第二篇では、「昭君」「護法」「小林」「壇風」「人形」「江野島」「玄象」「住吉詣」の八曲を取り上げ、それぞれのモチーフ、成立した経緯、典拠となった本説の説話、縁起等との関連を詳細に論じる。第三篇では、能の形成における説話的背景を、具体的に三篇の作品を用いて論じ、第四篇では演劇である能が絵画的に展開する様相を解明し、その史料性の意義を説き、第五篇では狂言本の書誌学的な考証をする。

第二部「幸若舞曲」の第一篇は、「満仲」「和泉か城」「未来記」をとりあげ、その形成と作者、舞曲における位置づけをする。第二篇は幸若舞曲の詞章の流動性と固定化について、第三篇では室町物語とされる「山鹿物語」の語り物的性格を文体によって考察、第五篇では幸若舞曲の絵巻・絵本の諸本を調査整理し、絵入り版本「舞の本」の挿絵と古活字版とのかかわりを考証する。なお、巻末には能と幸若舞曲に関する貴重な大方家の資料を影印にして解説を付す。

論文審査の結果の要旨

中世の劇文学としての能と幸若舞曲とは、それぞれ研究の歴史も長く、研究者によって今日多くの成果の蓄積もある。ただ、これまでは比較的それぞれ別のジャンルとして扱われ、幸若舞曲から能の形成へという関係の前提のもとに、両者の本格的な関係、共有する素材の背景などは等閑視されてきたきらいがある。著者はむしろ両者の緊密な関係を認め、中世劇文学という視点から、多様な問題点を摘出するとともに、可能な限りの資料を調査整理し、総合的体系的な考察を進めていく。その方法として特筆すべきは、(1)資料の博捜、(2)書誌的研究、(3)作品の考察、(4)絵画資料の援用を指摘することができる。「舞曲の絵入り本一覧稿」一つを取り上げても、42曲の舞曲の伝本について、国内外を含めての詳細な集成は貴重な労作であるほか、全体における考察の根底には文献資料の徹底的な調査がうかがえる。劇能の歴史にとっては重要な、「貞和五年春日社臨時祭次第」の書誌調査、テキスト・クリティーク、そこからの解釈による新しい発見など、すぐれた分析といえよう。また、多くの能作品の成立した背景としての物語や説話・縁起とのかかわり、そこから中世の古典注釈書にも及ぶなど、広い視野と該博な知識を駆使する。絵入り幸若舞曲の詞章は絵入りではない古活字版を継承し、挿絵は絵入り古活字版を受けるなどの成果は、新しい発見といえる。また挿絵の問題、御伽草子の絵との関係など、興味は尽きることがない。

能に関しては方法が異なるとはいえ、能勢朝次『能楽源流考』が存するが、初期の能をどのようにとらえるかの視点や資料にはややもの足りなさを感じるし、挿絵の問題はさらに視野を広げるべきではないかと思う。もっともそれらは本書の論点とは異なるし、これ以上は資料的な困難さもあるため、今後は共同による学際的な研究が望まれる。ともかく本書は、きわめて刺激的で、学界に裨益するところは大いなるものがある。このような次第で、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位に充分ふさわしい価値を有するものと認定する。